

【講演会等報告】

あべ弘士氏講演会

津曲 敏郎

開催日：2013年3月23日  
開催場所：北海道大学総合博物館  
演題：「地球のいのち—ロシア沿海州から北極海、アフリカまで」  
講師：あべ弘士（絵本作家）  
主催：日本文化人類学会北海道地区研究懇談会  
共催：北海道大学総合博物館／後援：北海道民族学会

言うまでもなく、人間は古くから動物と深い関係を築いてきた。狩猟や敵対・共存・畏怖の対象としての野生動物から、牧畜・役畜さらには愛玩の対象としての飼育動物まで、そのかわり方はさまざまである。食用や衣料品、工業製品への利用など動物から受ける恩恵ははかりしれないが、「いのち」ある生きた動物とのかかわりは時代を追って希薄になりつつある。多くの現代人にとって、今や肉や魚はスーパーのパック詰めされた商品でしかないし、子どもたちにとって、犬猫や身のまわりの小鳥や昆虫以外の動物を、映像ではなく実際に目にする機会は、都会では動物園ぐらいだろうか。

しかし、地球上には人間以外にたくさんのいのちの営みがあり、それを知り、慈しみ、共存することが大切であることを、あべ氏の講演は訴えるものであったように思う。

と言っても、声高に自然の危機や野生動物の保護を叫んだりはいしない。ホッキョクグマの親子にそそぐ優しいまなざしから、また極東を流れる川の姿がちょっと前の北海道にも見られたといった何気ない一言から、あるいはサバンナの（ある種、追い詰められた）動物たちの生きる姿から、聴衆は「いのち」とそれを育む自然のかけがえのなさを再認識したにちがいない。

講演の大半は、氏が一昨年訪れた北極圏のスバルバル諸島で出会った「いのち」たちの話に向けられた。ホッキョクギツネ、ウミガラス、アザラシ、セイウチ、シロイルカ、トナカイそしてホッキョクグマ。厳寒の地にも（むしろ人間のいない土地だからこそ）豊かな野生のいのちが営まれていた。氏の観察眼の鋭さは、動物の特徴を的確に捉えた独特の筆使いの絵からもうかがい知れるが、たとえばセイウチのヒゲを双眼鏡で数



えたら、横 17 列、縦 10 段だった、という話からわかるように、決して輪郭だけを大括みに眺めた結果ではなかったのだ。また、アザラシがわざわざ小さな氷に寝ているのは、きっと天敵のホッキョクグマに襲われないために違いない、という話も動物の生態に通じた専門家ならではの見方を感じさせた。ホッキョクグマの母親が 2 頭の子を初めて海にいざなう場面から、一緒に生まれた子どもにも性格の違いがあることを見抜き、さらにそこから親子のほほえましい「会話」まで読み取って、1 篇の作品に仕立ててみせる。動物絵本がどのように生まれるのか、創作の秘密を垣間見ることができた。なお、この北極の旅の様子は、豊富なスケッチをまじえて刊行されている（あべ弘士『こんちき号北極探検記—ホッキョクグマを求めて 3000 キロ』講談社 2012 年刊）。

その「あとがきにかえて」でも、あべ氏はこう書いている。「いまは静かに旅のあれこれを心の中で熟成させ、(中略)文と絵として私の中から創造されることを待っている。動物たちにもそうだった。求めなかった。向こうからやってくるのを待っていた。だから出会えたのだと思う」と。観察と創造の極意と言うべきだろう。この言葉に続けて記された句が、今回の講演の眼目と同時に、あべ氏の作品に一貫した姿勢を物語っている。

「シロクマもカモメも私も地球の住人」

なお、本会では 2006 年 3 月にもあべ氏の講演会を開催しており、筆者による報告が本誌第 2 号 (2006: 93-94) に掲載されている。

(つまがり・としろう／北海道大学)

